

編集後記：最近、出張でチベットのラサに行きました。チベットへは2007年以来でした。高所順化がいつも問題になるのですが今回は比較的順調に行きました。それでも頭痛と吐き気に悩まされ、かといって寝込んでいても順化できないので、頭痛薬を飲んでホテルの部屋の中を歩き回っていました。

さて、ラサの北約120kmのところ中央チベットで最大かつ、標高が最も高いところにある湖、として知られるナム湖があります。途中、ニェンチェンタングラ山の峠を越えて行きます。チベットでは最近鉄道も開通し、開発が進んでいますが、ナム湖までの道路も全て舗装されていました。途中で観光バスを何台も見かけ、景色のいいところでは記念撮影をしている光景を見ました。そう、この地域も観光地化しつつあります。幸い我々の行くところは観光客も来ない場所だったので喧騒にも煩わされることはありませんでした。

ナム湖畔には中国科学院の観測所があります。職員

が常駐し気象、水文、大気化学、地震などの観測を行っており海外の研究機関との共同研究も行われています。ここに来て生の自然現象に触れていると、気象学の基本に立ち返って客観的に自然を見ることの大切さを改めて思い知らされました。気象学は自然相手なので自然現象そのものが教師です。標高5000m近くのチベット高原に立つと、平地と違い地面と対流圏上端との距離が約半分になってしまうので、大気現象が高さ方向に圧縮された様相を示します。湖畔に立ち周りを見ると湖周辺は雲が立っているのに、湖の上はぼつかりと青空が見えました。これは湖面の温度と周囲の陸面の温度の違いではなからうかと感じました。

1日中空を眺めて雲を見ていても飽きません。このような中で雑用もなくじっくりと考える時間が持てたら、と考えるのは私だけではないでしょう。ただ、空気が薄いので体には負担になりますが。

(萩野谷成徳)